本との出会いを楽しむ　第9回

文庫本の楽しみ

北日本新エネルギー研究所　教授　神本正行

学生の頃、予期せぬ実験結果が出てきて何日考えてもわからなかったとき、指導教官に渡されたのがアガサ・クリスティの「メソポタミア殺人事件」です。「どうだった？一番犯人らしくないのが犯人じゃなかったかな？」との先生の言葉通り、思いもかけぬことが実験結果の原因でした。以来、探偵ものやスリラー・サスペンス、特にアガサ・クリスティとジョン・グリシャムはずいぶん読みました。フレデリック・フォーサイスの THE DAY OF THE JACKAL「ジャッカルの日」やマイケル・クライトンの STATE OF FEAR「恐怖の存在」などのテンポのよさも忘れられません。「恐怖の存在」は温暖化にまつわる小説です。内容はこれから読む人のためにあえて書きませんが、温暖化に関わる豊富なデータが引用され、巻末には温暖化に関する著者の率直な感想が書かれています。温暖化の専門家からは内容について批判もありますが、複雑化した科学と政治、一般の人々と科学との関わりについても考えさせられる一冊です。

文化や芸術について印象に残っている本の一つに岡倉天心の The Book of Tea「茶の本」（1906年刊。原文は英語）があります。誰も茶道をやっていないのになぜ我が家の本棚にあるのか気になった本でした。読んでみるとお茶の作法や歴史に留まらず、その思想的・哲学的な深さと広がりについて書かれていました。日露戦争の勝利に沸く時代にあって、わが国の持つ精神文化が決して西洋に劣るものではないことを欧米に向かって発信したものです。東日本大震災の津波で流失した天心ゆかりの「六角堂」（東茨城）がこの４月に再建されました。震災からの復興と再生を目指すとき、「茶の本」に書かれた天心の文化や国際化に関する考えは、いろいろな意味で大いに参考になります。

ところで「茶の本」にも出てくる「呉春」は、大阪府池田市の酒の名前「呉春」の由来となった絵師です。池田市に住んでいたとき「呉春」がえらく気になり調べたところ、司馬遼太郎に「天明の絵師」という短編がありました。天明の大火の際に丸山応挙と偶然出会い、師匠の蕪村流の画風から離れ、「四条派」と言われて繁栄した呉春を描いたものです。生前はその絵があまり評価されなかった「蕪村」と今はあまり顧みられない「呉春」の対比によって、芸術や人の生き方が語られています。

野球と音楽に明け暮れてあまり本を読まなかった理系人間の私も、こんな風にいろいろなきっかけで、様々な本を読むようになりました。共通点は「文庫本 Paper book」。そう、ほとんどの本は電車の中で読みました。特に混んでいる車中で本を読むには文庫本に限ります。この手軽さが好きでいまだに文庫本ばかり読んでいます。しかし、そうは言ってもやはり理系人間です。もう少し時間に余裕ができたら、学生のときに読んだ物理や化学の名著の数々をじっくり読んで、著者の哲学と論理の美しさをもう一度味わいたいと思っています。

（かみもと　まさゆき）